

教会——第1部

「あなたはペテロ。この岩の上に、わたしの教会を建てよう。死の力も、それを打ち破ることはできない。」

マタイによる福音書 16章18節

自らをキリスト教教会と称する団体は数多く存在し、その名称も多種多様であり、イエスとその使徒たちの教えに関して異なる種類の信仰を掲げています。こうした見解の相違を考慮する際、聖書が教会とは一体何であるか、またそれに関する神の御心は何かを問うことは、決して不適切ではないと考えます。どれが真の教会であるかを知る方法はあるのでしょうか。それとも、すべての教派が合わさって真の教会を構成しているのでしょうか。

「教会」という言葉は旧約聖書には登場せず、新約聖書で初めて使われたのは、冒頭の聖句にあるように、イエスがペテロに「死の力」もそれを打ち破ることはできないと告げた際でした。この聖句における「教会」という言葉は、ギリシャ語の「エクレシア (ekklesia)」の訳語であり、これは「呼び出された者たち」、あるいは「選ばれた者たち」を意味します。イエスは弟子たちに、「わたしはあなたがたを世から選び出した」（ヨハネ 15:19）と言われました。本質的に、教会とは、キリストの招きを受け入れ、世から切り離された人々の集まりです。

教会は建物ではありません。とはいえ、「教会」という言葉は、会衆が集まる場所を指すためにしばしば用いられます。もし、会衆のな集いの場所を表すのに「集会所」という表現がより広く使われていれば、教会という言葉そのものの真の意味に関して広く見られる誤解をいくらか和らげる助けになるかもしれません。

イエスの宣教活動において、イエスが「教会」という言葉を用いたのはわずか三回でした。一度はペテロへの言葉の中で、そして二度目は、弟子たちの間で生じうる誤解に対処するための適切な手順を教える別の機会においてでした。（マタイ 18:17）次にこの言葉が登場するのは、ペンテコステの日にペテロの説教によってキリストを受け入れた三千人の記述に続く、使徒行伝2章47節です。そこには、「主は救われるべき人々を日々教会に加えられた」と、ただそれだけを簡潔に記しています。

この単純な事実の記述には、深く考える余地がある。五旬節の日にだけで、三千人が「教会」の一員となり、その後も「毎日」新たな改宗者が加わりましたが、水による洗礼以外の、いかなる正式な入会式が行われたという記録はありません。これらの改宗者はすべてユダヤ人でした。使徒たちの説得力ある働きかけによって、彼らが自分たちの指導者たちが十字架につけたイエスが、まさに約束されたメシアであることを認めたとき、彼らはイエスを信じ、洗礼を受けました。

それだけの単純なことであった！その後、弟子たちの数が増え、互いに励まし合うために集まるよ

うになると、こうした人々の集まりは「教会」と呼ばれるようになった。使徒行伝11章22節には「エルサレムにある教会」と記されている。ローマ人への手紙16章5節では、パウロが「彼らの家にある教会」、すなわちプリスキラとアクイラの家にある教会に挨拶を送っている。

これらの聖句から、キリスト教の初期においては、信者の集まりは、その規模や場所にかかわらず、それぞれが教会と見なされていたことがうかがえます。実際、それらは教会でした。なぜなら、そのような信者の集まりは、福音によって、世から離れ、イエスの足跡に従うよう召された人々によって構成されていたからです。

これらの個々の集まりには、特定の教派名はありませんでした。それらはその所在地によって識別され、「エルサレムの教会」、「フィリピの教会」、「ローマの教会」、あるいは場合によっては、信者たちの誰かの家で集会を開いていた「教会」などと呼ばれていました。

『ヨハネの黙示録』第2章と第3章では、7つの教会が言及され、それらが所在する都市名によって特定され、特別なメッセージが送られています。これらの七つの教会は、象徴的な意味で、ペンテコステから現在に至るまでの様々な時代のすべての信者を代表していると考えられる根拠があります。これは「教会」という言葉のもう一つの、より広い用法であり、主が世から召し出され、主とその御業に仕える者と見なされる、あらゆる場所にいるすべての人々を表すものです。

イエスがペテロに、「死の力」は教会に打ち勝つことはできないと語られた際、その言葉には、より広範で一般的な意味が込められていました。エペソ人への手紙1章22節、23節で、パウロがキリストを「すべてのものの頭であり、教会、すなわちキリストのからだの頭」であると述べているのも、この適用に基づいています。パウロが「生ける神の教会、真理の柱であり土台」について再び記しているのは、まさにこの意味においてである。(テモテへの手紙第一3章15節)

コリントの信徒への手紙一12章12節、13節で、パウロは教会がキリストの「体」とであるという考えについて詳しく述べています。彼はこう言います。「人の体には多くの部分がありますが、それらの多くの部分が一つのかたちをなしています。キリストの体もまた、それと同じです。私たちの中にはユダヤ人もいれば、異邦人もおり、奴隷もいれば、自由な者もいます。しかし、私たちは皆、一つの御霊によって一つの体にバプテスマを受け、皆、同じ御霊を分かち合っているのです。」

入会方法

どうすれば教会の会員候補、すなわちイエスと使徒たちによって設立された教会の会員になれるのでしょうか。先に引用した使徒行伝2章47節には、「主は救われるべき人々を日々教会に加えられた」と記されています。これは、主の教会の会員となることが主ご自身に依存していることを示しています。この点については、すべてのクリスチャンが認めることだと私たちは信じています。しかし、主はどのようにして教会に会員を加えておら

れるのでしょうか。また、主によってその教会に属する者と認められるためには、どのような条件を満たさなければならないのでしょうか。

簡潔に言えば、聖書は教会に近づくための段階として、第一に、私たちが罪の呪いを受け、滅びゆく人類の一員であり、それゆえに自分の義によって神の御前に立つことはできないという事実を、悔い改めて認めることであると示しています。（イザヤ**64:6**、マルコ**2:17**、使徒**26:20**）。次に、イエス・キリストを私たちの個人的な贖い主であり救い主として受け入れ、その流された血の価値によってのみ、私たちが神に受け入れられることができるかと悟ることです。（使徒**13:38,39**；**16:31**；ローマ**3:21-23**；**5:1**）

そして、贖い主の流された血の功績に対する確信に基づき、私たちは、神のな御心を行うために、何の留保もない献身をもって自分自身を神に捧げるよう招かれています。これを、自分自身を神に「奉獻」することと呼ぶことができます。この奉獻は、人に対してではなく、またいかなる地上の組織に対してもではなく、神に対してなされるものであることを強調しておきましょう。

この献身が私たちの生活において何を意味するかについて、聖書は極めて明確に述べている。イエスはこう言われた。「だれでも、わたしに従いたいなら [わたしの弟子になりたいなら]、自分を捨て、毎日自分の十字架を負い、わたしに従いなさい。」（ルカ**9:23**）。自分を捨てるということは、単に些細な楽しみや満足を短期間、あるいは一生涯にわたって断つことだけを意味するのではな

い。むしろ、その言葉が示す通り、完全な自己否定を意味します。これは、ペテロが三度、イエスを知らないと言ったことをイエスが予告された際にも用いられたのと同じ言葉です（マタイ26:33,34）。したがって、自己を否定するとは、自分の意志を認める権利を完全に放棄し、その代わりに、キリストと聖書を通して示された神の御心を受け入れることです。

イエスの招きに応じて、自己を徹底的に否定する者たちに対する神の御心とは何でしょうか。それは、日々自分の十字架を背負ってイエスに従うという、イエスのさらなる招きの中に表されています。イエスは、死へと向かうことを示すために、十字架を背負うという象徴を用いました。イエスがこの招きを与えた時、イエスご自身が犠牲としてご自身の命を捧げておられました。その犠牲は、カルバリの丘で「すべては成し遂げられた」と叫ばれた時に完成しました。（ヨハネ19:30）

十字架を背負ってイエスに従うというキリストの招きを受け入れる者たちもまた、犠牲的な奉仕の中で自らの命を捧げます。キリスト教時代の初期には実際に十字架にかけられた人々もいましたが、全員が文字通り十字架にかけられるわけではありません。多くの人が他の形で殉教しました。しかし、主のすべての弟子にとって、結果がどうであれ奉仕し、苦難に耐えるという意志は、必ず持たなければならず、また持つことになるのです。

イエスの足跡に従うというこの事柄について、パウロは「キリストの死の似姿に共に植えられた」と述べている（ローマ6:5）。私たちがキリストに

出会う前は、「罪と過ちの中に死んでいた」（エペソ2:1）のである。しかし、キリストが流された血の功績に対する従順な信仰を通して、私たちはアダムの罪による裁きから解放される。それでも私たちは死ぬ。しかし、それは罪人としてではなく、イエスと共に犠牲となる者としてである。パウロはこの考えを次のように記している。「ですから、兄弟たち。神のあわれみによって、あなたがたに懇願します。あなたがたの体を、神に喜ばれる、生きた、聖なる、神へのささげ物としてささげなさい。それが、あなたがたの理にかなった奉仕です。」ローマ人への手紙12:1

キリストにバプテスマを受けた

ローマ人への手紙6章3、4節で、パウロは次のように記しています。「キリスト・イエスにバプテスマを受けた私たちは皆、その死にバプテスマを受けたことを知らないのですか。ですから、私たちはバプテスマによって、キリストの死と共に葬られたのです。それは、父の栄光によってキリストが死者の中からよみがえられたように、私たちもまた、新しいいのちを歩むためです。」ここで言及されているバプテスマは、水によるものではなく、キリストへの、そしてキリストの死へのバプテスマです。

新約聖書における「バプテスマ」という言葉は、「埋める」または「水に沈める」という意味のギリシャ語から訳されたものです。キリストへの私たちのバプテスマとは、私たちの意志をキリストの御心の中に埋めることです。それは死のバプテ

スマです。なぜなら、私たちがキリストと共に死ぬことが神の御心だからです。

黙示録20章4節では、この考えが「首を切られた」という言葉を用いて象徴されています。ここには、「イエスの証しと神の言葉のために首を切られた者たち」について記されています。これは文字通りの斬首を指すのではなく、頭（ ）に象徴される私たちの意志を捨て、キリストを私たちの頭として受け入れることを意味します。エペソ人への手紙5章23節；コロサイ人への手紙1章18節

パウロはこの点についてさらに詳しく述べ、「私たちはみな、一つの御霊によって、一つのからだにバプテスマを受けたのです」（コリント人への手紙第一 12:13）と語っています。私たちが主のもとに引き寄せられ、主の愛によって導かれて、自分自身を完全に主に献身するようになるのは、真理の御言葉を通して聖霊の働きによるのです。この献身とは、私たち自身の意志を捨て、キリストにある神の御心を受け入れることを意味します。したがって、もし私たちが死に至るまで神の御前に立つ立場に忠実であるならば、イエスは私たちの頭となり、私たちはキリストの体である教会の肢体となるのです。黙示録2:10

このようにして、神が御霊の力によって、キリストの教会に新たな会員を加えていかれることがわかります。私たち個人がなすべきことは、単に御霊の働きに従い、神の御言葉が示す歩み、すなわち悔い改め、キリストを受け入れ、神の御心を行うために自分自身を完全に献身して捧げるという歩みを踏むことだけです。

これらの段階を踏んだ後、神が私たちを受け入れ、教会の、すなわちキリストのからだの一員として認めてくださっているかどうかを知ることはできるでしょうか。私たちはそう信じています。パウロは、すでに引用した箇所、「バプテスマによってキリストの死と共に葬られ、父の栄光によってキリストが死者の中からよみがえられたように、私たちもまた、新しいいのちのうちに歩むようになる」と述べています。（ローマ人への手紙 6:4）。私たちは「新しいいのち」のうちに喜びをもって歩んでいるでしょうか。

またパウロはこう記しています。「だれでもキリストにあるなら、その人は新しい被造物です。古いものは過ぎ去り、見よ、すべてが新しくなったのです。」（コリント人への手紙第二 5:17）。私たちの人生の「過ぎ去った時代」に属する古いものは、もはや私たちにとって何の魅力も持たないという意味で、過ぎ去ったのでしょうか？（エペソ人への手紙 2:3）。私たちは、主の新しいもの——神への奉仕という新しい召命——新しい希望、新しい目標、新しい野心の中に、最大の喜びを見出していますか？

主への完全な献身というこの一步を踏み出した今、かつての友人や親族は私たちを理解できなくなるかもしれません。場合によっては、彼らは私たちを迫害することさえあるかもしれません。いずれにせよ、彼らは私たちの新しい生き方と調和できないため、以前と同じ程度の親密さを私たちに見出すことはできなくなるでしょう。私たちは彼らへの愛を少しも減らすことはなく、彼らのため

にできる限りのことをし続けるでしょうが、世の道と、奉獻された人々の道とは、しばしばかけ離れていることを学ぶことになるでしょう。私たちは今、そのような経験をしているのでしょうか？

パウロはまたこう記しています。「目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともないようなことを、神は御自身を愛する者たちのために備えておられます。」そして彼はこう付け加えています。「神は御霊によって、それらを私たちに啓示してくださいました。御霊はすべてのことを探り、神の深みさえも探り出すからです。」（コリントの信徒への手紙一 2:9,10）

主は、御言葉に含まれる驚くべき真理を、私たちが日々より深く理解できるよう導いてくださっているのでしょうか。キリスト・イエスにおける私たちの召しに関わる御言葉の「深み」は、私たちが主の御心を知り、それを行うよう努めるにつれて、より明確に理解されるようになっているのでしょうか。もしそうであるなら、主が私たちの献身を認め、義の道へと導いてくださっているという、さらなる証拠があることとなります。

イエスご自身が、神の御前における私たちの立場について、極めて明確な保証を与えてくださっています。まず、イエスはこう宣言されます。「わたしのもとに来る者を、決して追い出さない。」（ヨハネ6:37）。そして数節後に、こう続けて言われます。「わたしを遣わした父が引き寄せてくださらない限り、だれもわたしのもとに来ることはできない。」（44節）。もし私たちがキリスト

を通して神の引き寄せる力を感じたのであれば、これ以上の保証が必要でしょうか。

まことに、私たちが歩んでいる新しい生き方の霊的な事柄に対する喜び、かつての肉や世の事柄への関心の喪失、世からのある程度の誤解、あるいは迫害さえも、霊的な事柄、特に私たちの天の召しに関わるものへの理解が深まっていくこと——これらすべてが、私たちの献身が神に受け入れられ、私たちが実際にキリストに「バプテスマ」を受けたという証拠なのです。

水のバプテスマ

水によるバプテスマの問題は、当然ながら、そして当然のことながら提起されます。なぜなら、イエスご自身が水によるバプテスマを受けられ、私たちはイエスの足跡に従うべきだからです。水によるバプテスマの目的は何でしょうか。洗礼者ヨハネは悔い改めのためにバプテスマを受けました。(マタイ3:11)。彼は、イエスがなぜバプテスマを求めたのか理解できませんでした。なぜなら、イエスが罪人ではなく、むしろ聖く正しい方であることを知っていたからです。マタイ3:13-15；ヘブル7:26

ヨハネのバプテスマは、ユダヤ民族の成員にのみ適用されるものでした。それは、神が全民族と結ばれていた契約、すなわちシナイ山で結ばれた契約への回帰を象徴するものでした。また、ヨハネのバプテスマは、その後キリスト・イエスの宣教が始まる際に、ユダヤ人がそのメシアを受け入れ

る準備をするためのものでもありました。マルコ1:4,5 ; ルカ1:13-17 ; 使徒13:24,25

イエスは罪の悔い改めのためにバプテスマを受けたわけではありません。ヨハネにバプテスマを授けてほしいと頼む際、イエスは単にこう言われました。「今はそうさせてください。このようにして、私たちはすべての義を全うするのがふさわしいからです。」(マタイ3:15)。私たちが水によるバプテスマを受ける際、従うべきはイエスの模範です。イエスにとって、それは犠牲的な死を遂げるというご自身の契約の象徴であり、また、もし忠実であると認められれば、死からよみがえるという希望の象徴でもありました。

水に浸されるという行為は、これら二つの考えをいかに的確に表していることか。洗礼を施す者に水の中に沈められる時、人はその手に委ねられ無力となり、水から引き上げられない限り、死のように水底に沈んだままとなる。それゆえ、私たちの献身において、私たちはキリストと共に死ぬために自分自身を委ねる。それは、イエスがそうであったように、私たちも復活において引き上げられ、御国の偉大な未来の働きにおいてキリストと共にある者となるという、神の約束に励まされてのことである。ローマ人への手紙 6:4,5 ; ピリピ人への手紙 3:10,11

したがって、水による洗礼は、私たちがキリストに真にバプテスマを受けたことの美しい象徴である。それは、救いの儀式であるという意味で不可欠なものではない。しかし、水による浸礼を受ける資格を正しく備えた人々は、すでに自分の意志

を捨て、主の御心を行うことを誓約しているので、これが主が彼らに求めておられる御心の一部であることを認識し、喜んでこれに従うであろう。それ以外の態度は、神の御心に対する、すべてを焼き尽くすような愛に欠けることを示していることになる。

教会の組織

聖書は、キリスト教の初期の時代に、召された者たちによる様々な地域グループが、複雑な組織体制を持っていたことを示しておらず、また、それが教会に対する神の計画であったとも教えていません。しかし、当時の弟子たちには、ある程度の組織がなかったわけではありません。彼らの集まりには秩序があり、それぞれの能力に応じて、様々な奉仕の役割が異なる人々に割り当てられていました。 マタイ25:15；コリント人への手紙第一14:40；テサロニケ人への手紙第二3:6,7；テトスへの手紙1:5

初代教会の組織において、イエスは万人に認められた「頭」でした。これは、イエスが弟子たちに「あなたがたの師はひとり、すなわちキリストであり、あなたがたはみな兄弟である」と語ったご自身の教えと一致するものでした。（マタイ23:8）。パウロは、「キリストは教会の頭であり、また、からだの救い主である」と記しています。（エペソ5:23）。また、コリント人への手紙第一11章3節でも、彼は同じ考えを示し、「すべての人の頭はキリストであり、……キリストの頭は神である」と述べています。

イエスは教会の頭であるだけでなく、その礎でもあります。「だれも、すでに据えられた礎、すなわちイエス・キリスト以外の礎を据えることはできない」とパウロは記しています。（コリント人への手紙第一 3:11）。教会の成員は「神の家族」とも呼ばれており、それは「使徒と預言者という土台の上に建てられ、イエス・キリストご自身がその隅の親石である」と宣言されている。（エペソ人への手紙 2:19,20）

使徒ペテロは次のように記しています。「それゆえ、聖書にもこう記されています。『見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い礎石を据える。彼を信じる者は、決して恥をかくことはない』」（ペテロの手紙一 2:6）。また、ヨハネの黙示録14章1-4節において、使徒ヨハネもまた、イエスがシオン、すなわち完成された教会における「隅の親石」であることを確証している。これは、「あなたはペテロである。この岩の上に、わたしの教会を建てよう」というイエスの言葉に付随してきた誤解を考慮すると、特に注目に値する。（マタイによる福音書 16:18）

この主張は、ペテロこそがキリストの教会が築かれる「岩」であるという意味だと誤解されてきました。しかし、イエスがこの言葉を述べられる際に二つの異なるギリシャ語を用いたことが分かると、この解釈は誤りであることが明らかになります。「あなたはペテロである」と言われた際、ペテロと訳されるギリシャ語は「ペトロス (petros)」であり、これは「岩の破片」を意味します。しかし、「この岩の上に、わたしの教会を建てよう

」と言われた際、イエスは「ペトラ (petra)」というギリシャ語を用いられました。これは「岩の塊」、いわば巨岩を意味します。

ペテロは直前にイエスに、「あなたはメシア、生ける神の子です」と告白していました (マタイ 16:16)。イエスはこの告白を喜ばれました。その意味をもう少し明確にするために、イエスがペテロに答えた言葉を言い換えてみましょう。「ペテロよ、あなたの名は、あなたが小さな岩の破片——いわば小石であることを意味している。あなたの名前の意味と比較すれば、私がメシアであり、神の子であるという偉大な事実は、巨大な岩の塊——大きな巨石——のようなものであり、教会はその土台として私の上に建てられるのだ。」

来月号の『ドーンマガジン』では、「教会」というテーマを取り上げます。議論される重要なトピックには、十二使徒や教会の他の奉仕者たちの役割、教会の使命、そしてキリストを通して全人類を救うという神の計画における天上の段階と地上の段階などが含まれます。